

# 余暇という希望

— 3・11 以後の新たなライフスタイルを求めて—

Leisure as Human Hope  
Seeking the New Lifestyle after March 11.

藪 田 碩 哉

生活福祉学科教授

抄録：

何かをするための余暇ではなく、私という存在の根源に帰ることのできる余暇という時間を得ること、そこに自由の出発点がある。そしてこの自由によって私たちは現実にある「しがらみ」から離れた別種のコミュニケーションを生み出し、新しい「つながり」を紡ぐことができる。政治とは人々の多様なつながりを組織することであり、それによって社会を改良することである。しかし、先進国でもっとも低水準の余暇しか持ち合わせない日本人は、貧弱な政治意識に低迷せざるを得ない。より良い社会を作るために多忙からの解放が必須である。余暇は祈りや瞑想を通じて、生きることの意味や世界のあり方に思いを巡らすことのできる時間ともなる。労働と生産を追い求めた産業社会の行き詰まりに直面して、私たちは余暇に力点を置いた生活と社会を構想し直さなければならない。未来への希望は余暇にこそある。

Abstract：

Leisure is not for anything to do, its meaning is to return to the roots of one's existence. Leisure is the starting point where human freedom should realize. Leisure leaves us free from the constraints of reality, create a different kind of free communication by which we can build a new human "connection". Politics is to organize and lead a variety of people's connection to improve our society. However, Japan is the lowest level of leisure time among developed countries, so the Japanese can only have poor political awareness. To make a better society, we must require 'escape from busyness'. On the other hand, by way of leisure time people can speculate on the meaning of life and the world through prayer or meditation. We are now facing a stalemate of industrial society which has pursued the magnification of labor and production. We need to re-plan the social life which emphasizes on leisure. We can find some Hope for the future in the coming leisure.

キーワード：余暇、自由、コミュニケーション、共同性、政治、宗教

Key words：leisure, freedom, communication, community, politics, religion

## はじめに

余暇というテーマを基本に数十年、ものを考えてきた。余暇から遊び、レジャーやレクリエーション、そのあたりまでを自らの土俵と定め、この土俵へさまざまな問題と呼び込んで、教育問題、労働問題、環境や空間の問題、政治から経済、はては哲学から宗教までも、余暇という眼鏡をかけて見つめようと努めてきた<sup>註1)</sup>。

余暇というのは文字通り「余った暇」である。この定義は、遙か16世紀の日葡辞書の「アマルイトマ」まで遡ることのできる由緒正しい定義である。余暇をテーマにしているという、多くの人は「余った暇」をやってどうするのだ、何か得るところがあるのか、といぶかしい表情をされる。余暇研究などと言おうものなら、それこそ暇人の暇つぶしの最たるものと受け止められてしまう。世人はみな、暇とは目障りな蚊のようにひねり潰すものと理解しているのである。

余った暇の「余」という文字だが、多くの人の連想体系では、これは「余計の余」、あっても仕方のない余りもの、という認識なのであろう。しかし筆者は余暇の余は「余裕の余」であって、あることが望ましく、むしろ人生の大きな課題である「ゆとり」に連なるものだと捉え直したい。そもそも「余剰」というのは事の結果ではなく、事を起こす時の目的である。隙間のない停滞した状態から何ほどかの余りの余裕を広げるためにプロジェクトが起こされる。資金を投資して事業を始めるのは元手を回収した後の余りを獲得するためではないのか。マルクスは労働の剰余価値が資本家に搾取される資本主義のメカニズムを解明し、社会の変革を訴えたのだが、時間の剰余価値に注目して、その獲得を目指すことが社会改革のもう一方の課題ではないのか。以下は、余暇なるものに一縷の希望を託しながら思考しつづけてきた一学徒のリタイアを前にしたつぶやきである。

### 1 余暇の中核にある自由

余暇について思いを巡らせるといつも浮かんでくるのは「余暇気分」の原体験である。その昔、中学生だったころ、いちばん楽しかった時間は土曜日の昼であった。午前の授業が終わったという解放感、今日はもう何も拘束がなく、明日もまた一日自由な時間だという気分は何にもまして清々しいものだった。この解放感は高校から大学、そして社会人になってからも同様で（週休二日制になってからは金曜日の夕方に移るが）、大人人になって仕事と余暇のけじめがいささかあいまいになるまで続いた。とは言え大学にこの状況がないわけではない。前期・後期の最後の授業が終わった後の気分がこれに当たる。それは心の深いところから湧きあがる喜びで、生きることの嬉しさや楽しさを身体の隅々まで行きわたらせてくれる。私という存在がその本来のありように回帰するという感覚と言えよいだらうか。ところで筆者はもうしばらくでリタイアすることになるが、その日の気分はどうであろうか。さらに深い解放感が味わえるのか、それともそこまで来るとある種の喪失感や終末への不安が心を過るのだろうか。

余暇という体験の中核には、自由と解放感がある。この自由は、いわゆる「からの自由」と言われるもので、拘束からの解放、非干渉の自由、言わば消極的な自由である。論者によっては、これに「への自由」を対置させ、何らかの目標に向かう積極的自由、自己実現の自由こそ「自由」

なるものの本来のあり方だと主張されるかもしれない<sup>註2)</sup>。確かに、受刑者が刑務所から出所してほっと安堵している気分の前者の自由に対して、自己主張や自由な表現を求める後者の自由こそ、擁護され追求されるべき重要な課題だと見えるだろう。余暇と自由を結合させるにしても、余暇こそ積極的自由の土台となる基本的な資源であるという論を立てることもできよう。

しかし、筆者は敢えて解放奴隷の心情に近いような「消極的自由」の人間的な価値にこだわってみたい。毎日忙しく働く人々が仕事を終えて「余暇」の領域に越境した時、人々の心に去来する深い安堵感こそ自由の原形質だと思うからである。自由論の泰斗バーリンも言っている。「自由の基本的な意味は、鎖からの、投獄からの、他人への隷属からの自由であり、これ以外の意味は、その意味の拡張か、さもなければ比喻である<sup>註3)</sup>」。バーリンはこう述べて消極的自由の価値を擁護したわけだが、現在、少なくともこの日本では鎖や投獄が市民の日常の脅威ではないかもしれない。しかし、他人への隷属、特に職場への隷属は勤労者の日常を支配している。新自由主義の風潮が支配してきたこの20年ほど、競争原理に駆り立てられて、企業でも官庁でも働く人々への抑圧は強化されてきた。その故に、働くこと（もっと広げて何らかの社会的な義務を果たすこと）から脱出して、何にもない、何でもない空白の時間に身を解き放つ時、だれもが「我に返る」ような気分を味わう。労働の中で見失っていた「我」が取り戻されるのが余暇の時ではないか。

「忙しい」という文字は、心と亡からなっている。心は滅亡してそこにはない、茫然自失の状態が「忙」なのだが、勤勉な日本人は「忙しい」ことが大好きで、「お忙しい」という言葉をほとんど誉め言葉にしている（逆に「お暇でしょう」と言われたら、それは非難か軽蔑と取られるだろう）。多忙こそ働く人々の常態である。ラテン語では余暇＝otiumに否定辞が付いたnegotiumが仕事を意味する（英語で言うnegotiation）のも同じ事情を表わしている。仕事は余暇の否定であり、逆に言えば余暇は仕事からの脱出である。仕事の中で失われた我を取り戻し、さまざまにしがらみから逃れ、たった一人になって改めて生きている自分を実感するところに余暇の存在理由がある。何かをするための余暇ではなく、私の容れ物としての、ただそれだけの意味しかない余暇という時間に出会うこと、そこにあらゆる自由の根源がある<sup>註4)</sup>。

ここで一言しておかねばならないのは、余暇の自由は仕事の忌避や破壊を目指すものではないということである。仕事がどうにも嫌いで、二度と働きたくないのなら退職すればいいのだし、自ら望まなくても会社の都合で失業させられることもある。しかし生活を脅かす失業が自由どころか自由の剥奪であることは論を俟たない。余暇の自由は仕事から離脱する自由であるとともに、またそこに回帰する自由でもある<sup>註5)</sup>。回帰するぐらいなら始めから仕事に止まればいいという人もあるかもしれない。実際、仕事にはまり込んで中毒症状を起こし、ついには過労死に至る日本人が後を絶たない。健全な生活のサイクルは、仕事と仕事の間に余暇という楔を打ち込み、仕事の暴走を差し止め、仕事の適切な位置づけを行うことによって初めて可能になる。

経済大国をもって任ずるわが日本は、残念ながら世界に冠たる余暇貧国である。勤労者の余暇を規定する要因としての労働時間は長く、休日・休暇は貧弱である。それも制度が保証する休みを消化しきれない（有給休暇消化率は相変わらず50%に届かない）ことからして、余暇への希

求が(たとえあったにしろ)抑圧されていると断ぜざるを得ない。この国では、ミヒヤエル・エンデの『モモ』に登場する時間泥棒＝灰色の男たちが暗躍して、人々の自由の基礎が掘り崩されているのである<sup>註6)</sup>。エンデの物語では、不思議な少女モモの活躍で灰色の男たちのたくらみは打ち砕かれ、人々は再び長閑な暮らしを取り戻すことができるのだが、しかし、日本では「モモ」はいったいどこにいるのだろう。

## 2 余暇がもたらす「つながり」

前項の論議から言えば余暇は孤独の時である。誰でもないこの私、世界にたった一人しかいない私という「実存」に回帰する時が余暇であった。私は突き詰めて言えば徹底して一人である。私の感じることを、考えることを真に理解できる他者は一人も存在しない。家族も友人も私の喜びを、ましてや苦しみを共有できはしない。個としての人間はまた「孤」であるほかはない。

この認識を徹底することによって、そこから反転する可能性が見えてくる。私が徹底的に孤独であるからこそ、私は他者との「つながり」を求めるのである。孤が孤のまま自閉してしまったのでは、人は生きる意味を見失うであろう。そもそも現実問題として私たちは一人で生きて行けるわけではない。誰かと交わり、徒党を組み、何らかの組織に参加して生きる糧を得るのである。とは言え、生きるために連帯したとしても、人は心中の孤独を簡単に払い捨てることはできない。職場の集団は仮装の交わりに過ぎない、と感じる人は少なくないだろう。仲間とともに話したり笑ったりしたとしても、それは上辺の「つきあい」であって、自分の真実の心はそこにはないのだ、という思いを誰しも一度や二度は抱いたことがあるだろう。それは仕事のつながりが食べて行くための手段的なつながりだからである。人はそれとは次元の違う、それ自体が目的であるような別種のつながりを求めている。

余暇の存在理由は、人と人の「出会い」の時になり得るということにある。その出会いは通り一遍の知り合いになるという程度のことでなく、人間関係学の文脈で言えば「エンカウンター」<sup>註7)</sup>であり、古典的な言い方をすれば一期一会の出会いである。その出会いを契機として、お互いが抱える孤独の深淵の底から呼びかけ合いが行われ、それぞれの実存に迫る深い交わりが生まれるような出会いである。

そうした出会いはまさしく余暇の中から生じる。余暇ではない仕事の中の出会い—それは日々無数に生じている出会いだが—は、たがいの実存の深みに届かない。仕事は利害の交錯する場で行われ、そこでの出会いは基本的には取引に過ぎない。互いに相手を自らの利益のための手段と見なし、そこから最大限の利得をひき出そうとするような出会いである。余暇の出会いはそれとは違って、マルチン・ブーバー風に言えば、相手を〈それ〉としてもの扱いする＝手段化するような出会いではなくて、相手を〈われ〉と同等の〈なんじ〉として扱うような出会いである。ブーバーは〈われ〉と〈なんじ〉の全人格的な呼びかけと出会いを通じて人間の全き回復が可能となるとしている<sup>註8)</sup>、そうした出会いを可能にするのが自由な時間としての余暇である。

余暇の自由とは、人との出会いの自由と置き換えることができる。余暇はあらゆる義務や拘束からの自由であり、換言すれば既存の人間関係からの自由である。余暇において実存に回帰した

人間は、全く何の縛りも持っていないがゆえに、原理的にあらゆる人と新たな関係を取り結ぶ自由を持っている。バーリンが「行為者の前に複数の扉が開かれており、選択が可能であるということ。これは、行為者が自由であるための最低限の条件である」と言っていることを踏まえれば、余暇の自由は相手を選ぶ自由でもある。

家族や同僚など身近な人との関わりは、喜びや楽しさの源泉でもあるが、反面ではさまざまなストレスを引き起こす元凶ともなる。およそ人の抱えるトラブルの大半は身近な人間関係のもつれにある。一たび争いが生ずると身近であるだけに泥沼化しやすいというのは、夫婦喧嘩をはじめ、よくある話である。そんな状況に疲れた時、人は休暇を取り、一切の近い関係から離れて（それには旅に出ることがいちばんだが）、まったく別種な関わりを持つとうとする。旅は人間関係のトラブルを癒す格好の方法である。失恋の痛手を癒そうとしてこれまでどれだけ多くの人が旅に出たことだろう。そして思いがけない出会いによって励まされ、勇気づけられもしたであろう。行きずりに出会った人と意気投合して話し込むという体験は多くの人が持っている。行きずりであるから、ほとんどの場合は別れればそのまま、もはや連絡し合うこともないのが一般であろう。だからと言ってその関係が浅いものだと一概には決められない。短い時間にもせよ、案外と深い、心の底を覗きこみ合うような話をしていたりすることも少なくないのである。外国旅行の折、飛行機に隣り合って座った見ず知らずの人に心の悩みを打ち明けるといった体験をしたことはないだろうか。国際便の長い飛行時間、閉ざされた狭い空間での、1回限りの出会いという稀有な条件が独特の心のふれあいをもたらすのである<sup>註9)</sup>。

余暇は、現実にある「しがらみ」から離れた別種のコミュニケーションを生み出し、新しい「つながり」を紡ぐ時間である。そしてこのつながりは一人から二人へ、多数へと展開していく可能性がある。何人かの人が自らの余暇を持ち寄り、それを同調させる＝余暇の共時化を行うと、そこに1つの新しい「つどい」ができる。これがクラブとかサロンとかサークルとか呼ばれる自由な余暇集団である。これらの集いがこれまでの歴史の中で大きな役割を果たしてきたことは、コーヒーハウスに始まるイギリスのクラブや宮廷の女性たちが生み出したフランスのサロン<sup>註10)</sup>や、もっと近くで言えば、第2次大戦後の日本で民主主義の実践の舞台となったサークル活動<sup>註11)</sup>など、興味深い事例に事欠かない。これらの余暇集団のあり様を考えると、事は政治の問題に接続する。

### 3 政治の背後にある余暇

余暇は政治の揺籃である。古い話から始めよう。古典ギリシャの自由民たちは、多くの奴隷の労働に支えられて、あらゆる拘束労働から解放され、有り余る余暇（スコレー）を持っていた。彼らはそれを何に使ったのだろうか。1つは身体を鍛えるスポーツである。支配者たる彼らは戦士として肉体を練磨するためにスポーツに打ち込み、均整のとれた美しい肉体を作りあげた。ギリシャ各地から戦士たちが集まってオリンポスの神殿に捧げられた競技が、近代オリンピック競技の起源であることは周知のことである。第2は学問と芸術である。余暇を土台にしたソクラテスの対話が「知を愛する」フィロソフィーを生み出し、スコレーという用語がラテン語のスコラ

(学校)になり、欧米語の school (英)、Schule (独)、école (仏)等になったことはよく知られている。ギリシャの詩も悲劇と喜劇も、自由民の余暇を土壌として花開いたのである。そして第3は「政治」である。自由民たちは自由な時間に自由な論議を戦わせ、都市国家＝ポリスの政治を取り仕切った(そこで politic という用語が「政治」という概念を生み出した)<sup>註12)</sup>。余暇は政治を支える土台なのである。

日本の話に戻ろう。「床屋政談」という言葉があるように、古来、暇な男達は床屋や酒場のような溜り場に集まって世間の動きやら世態風俗やらを論(アゲツラ)うのを好んでいた。対する女性たちも「井戸端会議」と言われる噂話の交換会に打ち込んでいた。政治というものを広義に捉え「人々の暮らしを円滑にするために行われる意見の調整や駆け引き」と考えるなら、政治は家庭にも職場にも地域社会にも、それなりの仕方で行われている。向う三軒両隣の住人の暮らしぶりを話題にしたり、「お上」のご政道を批判したりするのは政治活動の出発点である。その上に、身近な「政治」の仕組みとしてまずは町内会や自治会、マンションの管理組合があり、年齢階層別には子ども会から青年会、婦人会や老人会があり、目的別には消防団のような防災組織もある。学校には昔からPTAという父母参加の仕組みがあり、最近では「学校評議会」を設けて学校の運営自体に市民が関わる方式が取られるようになった。こうした地域組織を背景に市町村―都道府県の地方議会があり、さらには衆参両院の国会がある。仕組みとしては近代民主国家の体裁はみごとに整っているかに見える。

しかし、その実態はどうだろうか。現代日本人の政治参加は総じて低レベルと言わざるを得ない。それは地域の自治会から国政まで一貫している。市民組織への関心はまことに低く、集まる人はほんの一握りである。どの組織も会員の減少に悩み、特に役員になって組織の運営を引き受けるメンバーが出てこないことに危機感を持っている。自治体や国政選挙の投票率は呆れるほど低い。政権交代が現実になって空前の盛り上がりを見せた2009年衆院選でも得票率は7割に届かなかった。争点もはっきりしない、現職絶対有利のような地方選に至っては得票率が3分の1にも満たないような場合さえある。棄権もまた政治参加というのは言い逃れで、支持する候補者がいなくても選挙に出てきて白票を投じるのが政治参加というものである。

なぜ私たちは政治から疎外されているのか、あるいは政治を疎外しているのか。家庭や職場のような日常的世界には確かに「政治」があって、誰も否応なくその動きに巻き込まれているのだが、それらの身の回りの政治は私的な回路に閉じ込められて外の世界を発見できていない。我が家の家計のこと、職場の軋轢、世間を騒がすもろもろの事件、すべてはわれわれの住む社会と深くかかわる政治問題だという視点が発見できないからである。人々の思いは日常に封じ込められて空しく回転し、垣根の外のこととはそれが原発問題であろうが国際政治の問題であろうが「私とはカンケーない」世界の出来事にしか見えない。

私たちはなぜ先進国でも低水準の政治意識しか持ちえないのだろうか。それは筆者に言わせれば偏に私たちが政治の土台である余暇に恵まれていないからである。政治を行うためには多忙からの解放が必須である。この社会のどこに問題があり、その解決策は那邊にあるのかという論議を延々と飽きるくらい語り尽くすほどの暇がなければ、私たちが政治の難しさや面白さや、それ

らを包み込む政治の真の重要性に気づくことはできない。

現在の選挙は日曜日に行われる。日曜日は庶民にとって貴重な休みの時である。その休みをつぶして（一部と言えども）投票所に行くという行為はレジャーの選択肢の1つ、それもあまり魅力的とは言えない選択肢である。「たまの休みなんだから」と家で寝ているか、もっと刺激的なレジャーを求めてパチンコ屋に走るというのも意味ある選択ということになる。選挙が公民にとって重要な権利であり義務でもあるというなら、投票日は平日に、それも特別休暇にして（もちろんレジャー施設も休みにして）、国民あげて政治談議に花を咲かせ、こぞって選挙に参加する日にすべきだろう。

余暇を政治と結合する場として、床屋や井戸端が機能しなくなった現代において、それに代わる「コミュニティ・カフェ」という試みが登場している<sup>註13)</sup>。これは地域に気楽に集まることのできるたまり場を用意し、「カフェ」の茶飲み話に花を咲かせようという意図で作られている。普通の喫茶店と違って、設立したのは市民の有志で、運営形態も協同型というのが一般で、NPOの認証を受けているところも多い。無縁社会に陥って、隣人が亡くなって白骨になっていても誰も気づかないような人間砂漠が広がる現在、近隣のつながりを少しでも回復して、地域の支えあいを取り戻そうというのである。その意義を評価して行政が支援しているところも少なくない。

筆者自身も、日野市のコミュニティ・カフェの1つである市内・百草団地の「ふれあいサロン」に創設以来関わってきた<sup>註14)</sup>。団地の中央にある商店街が衰微し、1軒の蕎麦屋がつぶれた後を市が都の助成金を利用して改造し、サロンに仕立てた。平日の昼間は毎日やっていて、コーヒー100円お替り自由、運営は地元のボランティアで、客は中高年が圧倒的だが、毎日そこそこ賑わっている。このサロンで毎月一度、生活福祉学科の学生がプログラムを提供してきた。季節の行事をテーマに、歌ありゲームありクイズあり、簡単なクラフトやお団子づくりもあり、おしまいは地元住民と学生たちの世代を越えた談話を楽しむという趣向である。プログラムが発展し、昨年は常連客が参加した寸劇がサロンで上演された。介護保険の値上げのあおりを喰って餌をもらえなくなった野良猫たちが反乱を起こすという筋書で、抱腹絶倒のドタバタ劇だが、なかなか風刺的である。サロンを舞台に国政批判が愉快に展開されるというのは余暇の政治化の微笑ましい事例であろう<sup>註15)</sup>。

最近、コミュニティ・カフェがさらに進化した「哲学カフェ」も登場した。「哲学」という冠をつけて、テーマを設けてじっくりと対話を進め、徹底討論をしようという場である。フランスで始まった「ソクラテス・カフェ」が起源のようだが、この呼称から読みとれるように、ソクラテスの対話を現代に取り戻そうという意図がある。外国で流行ると何でも食欲に取り入れるわが国の伝で、あちこちで「哲学カフェ」の取り組みが始められているらしい。哲学と言っても高邁な議論に血道を上げるのではなく、日常の問題を、しかし、大きな視野を持って論議しようというのである。それこそ、かつてソクラテスが「愛智＝フィロソフィー」の名前で追求したことである。日常生活の背後にある問題点を掘り下げる議論の場は、人々の政治的な関心を高める場として機能するはずである。酒場の論議のように酔いととも雲散霧消する論議でなく、そこから得られた知見が発信され（そのためのツールはTwitterにしてもFacebookにしても誰もが使いこ

なせるものになっている)、別の場所に新たな議論の場が広がっていくなら、「哲学カフェ」はわが国の政治文化を高める上で大きな役割を果たすことができるかもしれない<sup>註16)</sup>。それにしても忙しい働き手たちにカフェに集まることのできる余暇を保證することが先決であろう。

#### 4 余暇と宗教の世界

再び論議を戻して、余暇の余暇たる所以、無為なる時間としての余暇に帰ろう。余暇があると誰もがぼんやりする。ぼんやり何かを考える<sup>註17)</sup>。時にはその考えが思いがけず広がって、我が身の来し方行く末に及ぶこともある。その時、大自然に抱かれた静かな環境にでも身を置いていれば、想念はさらに拡大して、人生とは何だろうか、人間とはいかなる存在なのか、というような途方もないことが脳裏に浮かんでくるかもしれない。

余暇は瞑想の時である。あるいは祈りの時と言ってもいい。静かに思いを凝らして人の世のことわが身のことを問い詰めたり、あるいは神のような至高の存在に向かって語りかけるという行為は、余暇の大切な役割の一つである。ヨゼフ・ピーパーは人間の価値を生きることの意味や世界のあり方に思いを巡らすことができることに求め、祈りや瞑想を行うことこそ余暇の究極の意義であると述べている<sup>註18)</sup>。

さまざまな宗教は余暇を原資にして成立したのである。モーセの十戒の1つに「汝ら安息日を聖とすべし」というのがある。神に捧げる日である安息日は、働くことが禁じられた「余暇の日」であった。『創世記』によれば神が天地を創造するには第1の日から第6の日まで6日を要し、最後の7日目に休息を取られたという<sup>註19)</sup>。安息日はこのことに由来して定められた休日で、ユダヤ教の戒律では、この日にはいかなる労働も行ってはならず、これに反すればかつては死罪に処せられたと言う。キリスト教ではそれほど厳格ではないようだが、安息日に当たる日曜日は、晴れ着を着て家族そろって教会に集まり礼拝を行う聖なる日である。だからこそ日曜日はカレンダーで赤く塗られている。収入を得るための労働を行ってはならず、礼拝の後は家族でレストランを訪れて食事をしたり、教会でも信者同士が交流するレクリエーションが行われたりする。神のもとにある聖なる時間に続いて、人々が楽しく交わる遊なる時間が設けられているのは、日本の祭礼で、厳かな儀式につづいて直会の饗宴や歌舞の奉納や勇壮な身体演技（綱引きとか玉の奪い合いとか）が行われ、人々が思い切り楽しむことと同形と言えよう<sup>註20)</sup>。

余暇は宗教の基盤であり、その「聖性」と「遊性」の両面から宗教を支えている。働くことをいったん断ち切らなければ、人間を越えるものとの対話を行うことはできず、また、集団の力を借りて人々の生きるエネルギーを解放し、日常から脱出した大かかきな遊びを実現することもできない。

現代の日本においては宗教の存在感は大きくない。仏教は葬式仏教に墮して日常の倫理生活に対してほとんど影響力を持っていないし、神道も正月や七五三のような行事に矮小化されて、国家神道に統合される以前の自然神道が持っていた、自然と人間との深い関わりを荘厳するエネルギーを失っている。キリスト教に至っては、明治の近代化に伴って西欧思想の定着に一役買ったとはいうものの、信者の数は百万人程度とされ、驚くほど少ない。クリスマスはもちろん、復



活祭（イースター）から最近ではハロウィンのような行事までもが日本人の生活に入ってきているにもかかわらず、それらは単なる季節のイベントで、宗教的意味合いは全く理解されていない。宗教の聖性の面だけでなく遊性の面だけを受容するというのが日本文化の特徴なのかもしれない。

日本の宗教が全般に力を失っているのは余暇という土台の脆弱さにその一因があるにちがいないと筆者は考えている。心も身体も消耗させる多忙な仕事に追いまかれる人々の中では、神様と言えども居場所を見つけることが難しいだろう。十分な余暇があって閑居を楽しむ生活の中に、ほのかに姿を現すのが神や仏のありようである。高齢者になると神社仏閣を訪ね歩く人が増え、キリスト教に入信したり、新宗教に皈依したり総じて信心深くなる傾向があるのは、あながち死の予感に囚われて神仏の救いを求めるというだけではない。余暇が一気に拡大する高齢期において、余暇の必然的なあり方として宗教的なものへの親近感が増すからだと思われる。

若い世代にとっても、忙しく働く勤労世代にとっても、この混迷の時代に宗教がもっと大きな意味を持っていいはずである。「神は死んだ」とニーチェが喝破して以来、現代人の多くは（イスラム世界を除いて）無神論、無宗教に傾いている。しかし、神はなくても宗教はありうる<sup>註21</sup>。神を打倒して人間が世界の主人公になるという野望は、地球そのものによって拒否された。地球がほんの少し身震いすれば、人間が築いた文明などひとたまりもなく破壊される。宇宙から巨大な隕石が飛んできて地球に激突すれば、かつての恐竜たちのように人間もまたあえなく絶滅していくであろう。大宇宙の前に人間という存在がまことに卑小であることに思い至る時、それは宗教的な心情に限りなく近づいている。人間を越えるもの、至高なるもの、永遠なるものにわが身をささげることによって、私たちは深い癒しを得ることができる。精神的に不安定な人々が増え続け、ニヒリズムが拡大し、鬱病のような心の病に陥る人が増加する中で、宗教の力を回復することには大きな可能性がある。その実現のために余暇の存在感を増すことは欠かせない条件である。

### おわりに ― 希望はどこにあるのか

3・11の未曾有の大災害 ― 地震、津波に原発事故の三打撃が日本社会に与えた爪痕は深く、また広い。ここからの復興には長い時間がかかるだろう。その過程でわれわれの生活のスタイルや価値観が根底から問い直されることは必至である。

私たちはこの半世紀ほどの間にまことに便利で快適な暮らしを実現したわけだが、大災害はその文明生活の脆さや危うさを白日の下に晒け出した。自然を破壊し、農業を捨て、伝統文化を忘れ、あまつさえ地域の人の繋がりがさえ等閑視する「無縁社会」の中で人間が幸せに生きられるはずもない。私たちが全幅の信頼を寄せてきた科学技術なるものも決して万能ではありえなかった。とくに原子力発電においては、政府と電力会社と一部の御用学者たちが一体となって人々に信じ込ませて来た安全神話が崩壊した。物理学者の山本義隆氏によれば、人間がコントロールできるはずのない「核力」に手を出したのがそもそもの間違いであったという<sup>註22</sup>。化学反応のように原子と原子の結合を操作するくらいならまだ人間の手の内にあった技術を、原子の構造そのものに踏み込んでこれを分裂させるまで進めたのは、人間の能力の限界を超えた暴挙であった。分裂

の際の強大なエネルギーを取り出すことはできても、そこから必然的に生ずる放射性廃棄物 — その中には何千、何万年も放射能を出し続けるものさえある — を人間は制御しえないのである。

近代化とともに始まった科学技術の進歩、それに支えられた産業社会の進展、どこまでも成長を続ける経済 — こうした右肩上がりのベクトルにストップをかけ、方向を転じなければ人類の未来は危うくなる。すでに地球の温暖化が不気味に進行し、それと関連するような自然災害が増えている。増大する人口を支えきれない飢餓の時代も始まっている。人類が勝手に作り出した廃棄物が地球を覆い、海は汚染され陸上の緑は急速に縮小している。その上、世界経済は混迷の度を増し、国家レベルでの経済破綻が現実のものとなっている。いったいこの先の世界に希望はあるのだろうか。

希望があるとすれば、それは、これからの社会がモノに支配される暮らしから脱却し、人間らしい人間の心を、人間同士の利害を越えた絆を、そして自然と人間との幸福な関係を取りもどすことができるかどうかにかかっている<sup>註23)</sup>。そしてその希望の原資は余暇という自由、余暇を元手にしたさまざまなつながりにある。労働を軸足に置いた産業社会の行き詰まりに直面して、私たちは余暇に軸足を移した生活と社会を構想し、その先に仄見える希望に賭けるしかあるまい。

#### <註>

- 1) 筆者のこれまでの主要な著作を年代順に並べてみると『遊びの構造論』1983年、『デザインする時間』1993年、『余暇生活論』1994年、『遊びの文化論』1996年、『余暇学への招待』1999年、『遊びと仕事の人間学』2004年、『余暇の論理』2008年、『日本社会とレクリエーション運動』2009年、となって余暇と遊びのオンパレードである。思えばよくも飽きもせず余暇や遊びと付きあってきたものである。
- 2) 「からの自由」と「への自由」を含めて、「自由」という問題は古今東西の多くの哲学者・思想家によって論じられてきた。その全貌を俯瞰するには斉藤純一『自由』がコンパクトで便利な本である。
- 3) パーリンはまたこうも言っている。「自由の擁護とは、干渉を防ぐという「消極的」な目標に存する。そのひとのまへの他のすべての扉を閉ざしてしまっただけひとつの扉だけを開けておくこと、それは、その開いている扉のさし示す前途がいかに立派なものであり、またそのようにしつらえたひとびとの動機がいかに親切なものであったにしても、かれが人間である、自分自身で生きるべき生活をもった存在であるという真実に対して罪を犯すことである。』『自由論』312-313頁。
- 4) 西欧の考え方の中で「余暇における自由」は重要な位置を占める。世界人権宣言の「余暇権」の条項を補強するものとして、国際レクリエーション協会が1970年に定めた「レジャー憲章」を見ると、第1条のレジャーの権利宣言に続く第2条は、「個人の自由」を打ち出してこう述べる。「完全な自由のもとにレジャーを享受する権利は絶対的なものである。個人的なレジャーの追求に必要な諸条件は、レジャーの集団享受の場合と同程度に保護されなければならない。」
- 5) 仕事からの離脱と仕事への回帰という相反する方向性が、労働—遊びのダイナミクスな構造を支えているというのは、『遊びの構造論』(1983年)で展開して以来、筆者の余暇・遊び論の基本的な枠組みである。用語としては仕事から離脱する局面を現わすのが「レジャー」であり、仕事への回帰の局面を示すのが「レクリエーション」であって、両者は相補的な関係にあると考えてきた。

- 6) ミヒャエル・エンデの『モモ』は、近代化・産業化が人間の時間をいかに変質させてしまったかを象徴的に表現した優れた寓話である。この事情を若手の余暇研究者である橋爪大輝は、灰色の男たちの資本主義的な時間性を、モモが体現する自由で余暇的な時間性と対比して明快に論じている。「余暇の時間性—M.エンデ『モモ』から—」日本余暇学会『余暇学研究』第14号 2010年、参照。
- 7) 人と人との真の出会いを体験するために「グループ・エンカウンター」という方法がある。隔離された小集団でともに一定の時間を過ごし、そこで生起するさまざまな経験を通じて、自己を発見し、同時に他者を見直そうというプログラムである。筆者も「グループワーク・トレーニング」と名付けた独自のエンカウンター活動を長く行ってきたが、日本では集中的なグループ体験と言っても2泊3日がいい所で、それ以上の日数を取ることは滅多にない。勤労者には長期の休暇を取ることが難しいからである。学校のキャンプ活動を見ても、3泊を越えるものは少ない。ここにも余暇貧乏が影を落としている。
- 8) ブーバーの「我とそれ」「我と汝」という2つの対人関係の対比を初めて読んだ時の衝撃は忘れ難い。考えてみると自分は対する人間の誰をも「それ」に貶めて、本当に「汝」として接したことがあったのかと深く反省させられたからである。ブーバーはユダヤ教の宗教学者であったが、紛争が続くイスラエルとアラブの和解に奔走し、両民族から同等に尊敬を集めたと言う。思想や宗教を越えて「汝」との対話を生涯にわたって続けた稀有な存在だった。
- 9) 現代においては新たな「出会い」はわざわざ旅に出かけなくても、インターネットの大海に泳ぎ出れば得られるのかもしれない。ネット上に氾濫する「出会い系サイト」がそれを示している。
- 10) パブやコーヒーハウスを起源とするイギリスのクラブは、紳士の社交の場として<男性原理>が支配していたのに対し、宮廷の女性たちの私的な集まりから始まったフランスのサロンは<女性原理>だとされる。しかし両者ともメンバー同士の対等な関係が重んじられる社交の場であった。園田『余暇の論理』第1章3.「余暇とクラブライフ」参照。
- 11) 日本の戦後史を彩る多彩なサークル活動の展開については、天野正子『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館 2005年、に詳述されている。戦後の民主化の流れと相携えて隆盛を見たサークル運動は1955年前後にピークを迎え、その後は拡散する。高度成長期には、余暇型・趣味型のサークルが広がり、リブ運動など女性たちの社会的な主張に添った新たなサークルも誕生する。そしてこれらは今日のNPO活動やさまざまなネットワークにつながっていると見られる。
- 12) 『政治学』と訳されているアリストテレス著作のもともとのギリシャ語は「ポリティカ」であり、「ポリスのこと」という意味である。そこには次のような記述がある。「正しく治められようとする国においては生活に必要なものに煩わされない閑暇が存しなくてはならない(第2巻第9章)。「徳が生じてくるためにも、政治的行為をするためにも閑暇を必要とする(第7巻第9章)。(山本三男訳、岩波文庫)
- 13) コミュニティ・カフェは、市民主導で作られた地域の「たまり場」で、高齢者の居場所づくりをねらいとするものと、幼児を抱えた若い母親をターゲットに子育て支援を目指すものが主流のようだ。公益社団法人長寿社会文化協会(WAC)は、全国のコミュニティ・カフェの情報交流とネットワークづくりを目指しており、『コミュニティ・カフェをつくろう!』という手引書も出している(学陽書房刊 2007年)。
- 14) 日野市は2004年に策定された「日野市健康増進計画」や2005年の「高齢者保健福祉計画」の中で高齢者の見守りの重要性を指摘し、それを受けて「高齢者見守り支援ネットワーク事業」が進められてきた。その中で「ふれあい交流型」の活動が打ち出され、「ふれあいサロン」の第1号が2008年4月に百草団地に設置された。筆者は当初から見守り支援ネットワークの運営委員長を務め、百草ふれあいサロンにも学生たちとともに関わってきた。
- 15) 「ものぐさ団地」の野良猫たちが活躍する「猫の恩返し」は「観客参加型創作スタンプ」と銘打って、

2010年11月から翌年2月まで3回にわたって上演され、やんやの喝采を浴びた。ふれあいサロンの関係者を始め、実践短大の学生も演技に参加した。台本とプロデュースは湊道子氏（実践短大講師「社会福祉とボランティア」担当）。

- 16) 小川仁志『日本を再生！ ご近所の公共哲学』（技術評論社 2011年）は、無縁社会を乗り越えて日本社会を蘇らせるために、身近な問題を社会につなげて考える「哲学カフェ」の可能性を検討したユニークな本である。著者自身、山口県の小さな町で哲学カフェを土台に映画祭を興したりする実践家で、「ご近所よ、哲学せよ！」と訴えている。
- 17) 岩波新書に『ぼんやりの時間』という本がある。著者の辰野和男は朝日新聞の社会部で活躍した記者だった。その彼が『ぼんやり礼讃』を書いたのが面白い。この中に「むだな時間はむだか」という項があって、エンデの『モモ』を引きながら無駄な時間の価値を説いている。
- 18) ピーパーは『余暇と祝祭』の中で、アリストテレスの「閑暇こそ中心にあってすべてはそのまわりを巡っている」という言葉を引用して労働中心の世界観を批判する。ピーパーに言わせると余暇は瞑想（コンテンプラチオ）の時であり、怠惰と対立する。常識からすれば余暇こそ、のんびり怠けている時間ということになるが、ピーパーの余暇は至高な存在との対話を行う最も充実した時間なのであり、そういう余暇を顧みないで働く人こそ怠惰なのだという。
- 19) 旧約聖書冒頭の「創世記」にはこうある。「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、御自分の仕事を離れ、安息なさった（2章2節）。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された（同3節）。」神が休まれた日は聖なる日なのである。人間はそのことを忘れてはならない。
- 20) 日本の伝統的な祭りにおいては、厳かな神事と爆発的な遊戯との対照が見事である。神事は神社によってさまざまな違いがあるにしろ、単純で閑雅に進行する。他方、一夜明けての奉納行事は、大綱を引きあつたり、裸の男たちが玉を奪い合ったり、大木を伐り出しそれにまたがって急な斜面を滑り落ちる諏訪大社の御柱祭のような危険極まりないものさもある。生のエネルギーの奔出とでもいうべき雄大な遊びと言える。
- 21) 日本人の大多数は特定の神を信仰していない。しかし、宗教心が皆無というわけではなく、初詣に神社に参って参拝したり、旅に出て由緒ある古刹を訪れて感動したり、結婚式になればキリスト教風の誓いを立てたくなる。このいい加減さをあえて評価すれば宗教的寛容ということになる。日本の風土では宗教対立が激しく燃え盛ることは考えにくい。むしろすべての宗教にそれなりの出番を与えて包含しようとする。この態度は今後の宗教のあり方を考える上で一つの示唆を与えるものではなかろうか。
- 22) 山本義隆氏は1970年代の学生反乱の時代に東大全共闘の輝ける議長として権力と対峙した人物である。物理学の優秀な研究者であった彼は、その後、予備校の講師として生きる傍ら著作に打ち込み、『磁力と重力の発見』（みすず書房 2003年）でパピルス賞、毎日出版文化賞、大仏次郎賞を受賞した。氏の科学技術幻想肥大化への批判は説得力に富む。
- 23) 戦後の日本社会はハングリー精神を失ったが、代わりに「暇」を獲得した。しかもそれは物理的な時間の余裕ではなくて、精神の余裕であるとし、暇を土台にした参加型社会の構想を打ち出しているのは橋川幸夫『暇つぶしの時代』である。この著者も、成熟した工業社会におけるライフスタイルの中で、地域生活の重要性を強調している。

〈参考文献〉

- アリストテレス 山本三男訳『政治学』岩波文庫 1961年.  
イザイア・バーリン 小川晃一他訳『自由論Ⅰ、Ⅱ』みすず書房 1971年.  
マルティン・ブーバー 植田重雄訳『我と汝・対話』岩波文庫 1979年.  
ヨゼフ・ピーパー 稲垣良典訳『余暇と祝祭』講談社学術文庫 1988年.  
橘川幸夫『暇つぶしの時代—さよなら競争社会』平凡社 2003年.  
クリストファー・フィリップス 森丘道訳『ソクラテス・カフェにようこそ』光文社 2003年.  
斉藤純一『自由』岩波書店 2005年.  
辰野和男『ぼんやりの時間』岩波新書 2010年.  
小川仁志『ご近所の公共哲学』技術評論社 2011年.  
山崎亮『コミュニティデザイン—人がつながるしくみをつくる』学芸出版社 2011年.  
山本義隆『福島原発事故をめぐって』みすず書房 2011年.  
藺田碩哉『遊びの構造論』不味堂出版 1983年.  
藺田碩哉『余暇の論理』叢文社 2008年.